

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(五) 『法然上人念佛教化詞』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	三田國文 No.49 (2009. 6) ,p.39- 46
JaLC DOI	10.14991/002.20090600-0039
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20090600-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介(五)

『法然上人念佛教化詞』翻刻・略解題

恋田 知子

前号に続き、陽明文庫蔵『道書類』のうち、『法然上人念佛教化詞』を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵『道書類』は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間(一五九六—一六二四)の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される。

内題に「法然上人念佛教化詞」と記される本書は、『法然上人行状画(四十八巻伝)』の抄出本である。法然伝の抄出本としては、同じく陽明文庫に蔵される『黒谷上人絵詞拔書』が知られているが、本書はそれとは異なる箇所を抄出するものである。すなわち、『法然上人行状画(四十八巻伝)』卷二十所収「河内国天野の四郎」話、卷二十四所収「法性寺左京大夫信実朝臣の伯母」話、卷二十二所収「往生の用心百四十五ヶ条」などを収めている。十四世紀半ば、知恩院の総力を背景に、宮廷絵師や能書家を総動員して制作され、「勅修御伝」とも称された四十八巻伝が、その後の貴族圏においてどのように享受されたのか、先の『黒谷上人絵詞拔書』同様、その一端をうかがわせる点で、本書は抄出本ながら貴重な伝本のひとつとして位置づけられよう。書誌については、以下のとおりである。

・函架番号 近下七二一〇

・形態 写本。一冊。仮綴。

・寸法 縦二九・五糎 横二二・〇糎

・表紙 本文表紙共紙。楮紙。

・丁数 墨付二十三丁。

・本文 半葉七行。漢字平仮名交じり。字高約三三・〇糎。

・内題 「法然上人念佛教化詞」

・奥書 なし。

・印記 一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打つなど、読解の便宜をはかった。

注

- (1) 陽明文庫蔵『道書類』の詳細については、『三田國文』連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって」、『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇八年、拙稿「説法・法談のヲコ松―『幻中草打画』の諸本―」、『仏と女の室町 物語草子論』等間書院 二〇〇八年、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子『恋塚物語』をめぐって―」(徳田和夫氏編『お伽草子百花繚乱』等間書院 二〇〇八年)を参照された。

(2) 井川定慶氏『法然上人公傳の研究』(法然上人傳全集刊行會 一九六一年、法然上人傳研究會編『法然上人傳の成立的研究』(智恩院 一九六一年、拙稿『慈芳上人極楽任問答』にみる念仏と女)『仏と女の室町 物語草子論』笠間書院 二〇〇八年)など参照。

【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げる。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。
なお、本稿は科学研究費補助金(二〇八二〇〇四六)による研究成果の一部である。

【翻刻】

法然上人念佛教化詞
河内國に天野の四郎とて、強盜の張本なる物ありけり。人をころして寶をかすむる事を業して世をわたりけるか、年たけての上人の化導にきし、出家して教阿弥陀佛と名つけけり。常に上人の御もとにまいり、教訓をかふりけるか、或時夜はんはかりに上人おきたまひて、ひそかに念仏したまふかとおほしき事ありけり。教阿弥陀佛うちしはふきたりければ、上人やかてふしたまひぬ。ね入たまへる様にてその夜もあけにけり。教阿弥陀仏、こころのうちにいと心へぬさまかなとおもひければ、尋申に及ばてやみにけり。ほとへてのち又まいりたるに、上人は持仏堂におはしませは、教阿弥陀佛は

「(1才)

「(1ウ)

大床に伺候して申けるは、無縁の物にて在京かなひかたく侍は、相模の國河村と申所に、相しりたる物候をたのみてまかり下侍り。然に年たけぬれば、又見參に入らん事も

かたく候。もとより無智の者にて侍へれば、甚深の法聞をうけたまはりし時も、その甲斐あるへしとも覺侍す。只詮をとつて決定往しやう仕ぬへき御一言をうけたまはりて、生涯の御形見に備へ侍らんと。上人のたまわく、先念仏には甚深の義と云事なし。念仏申物は、必往生すと知るはかりなり。いかなる智者學生なりとも、宗あかささらん義をは、いかてかつくり出して

いふへきや。ゆめく甚深の義あるらんと、ゆかしくおもはるへからず。念仏はやすき行なれば、申人は多けれども、往生する物のすく

「(2ウ)

なきは、決定往生の故實をしらぬゆへなり。去月に又人もなくて御房と源空と只二人ありしに、夜はんはかりにしのびやかに起居て念佛せんをは、御房はきかれけるかとおはせられければ、寢耳にさやかにあらんとうけたまはり候きと申ければ、それこそ、やかて決定往生の念佛よ。虚假とてかざる心にて申念仏が往生せぬなり。決定往生せんとおもは、かざるこころなくして、まことの心にて申へし。ゆいかいなき少もの、若又畜生などにむかひては、

「(3才)

「(2才)

かざる心はなけれども、友同行は云に及ばす。

その外つねになれみる妻子眷属なれとも、

東西を奔る程の者に成りぬれば、それ

ためにならすかざる心は發るなり。人の中に

すまんには、その心なき凡夫は有へから

す。凡て親も疎も貴も賤も、人にすきたる住

生のあたはなし。それが為にかざる心を發して

順次の往生を遂されはなり。さりとて獨居も

叶はず、いかゞして人目をかざる心なくして、ま

との心にて念仏すべきと云に、常に人に

ましりて、靜なる心もなく、かざる心あらん物は、

夜さし更てみる人もなく、聞人もなからんとき、

忍びやかに起居て、百返にても千返にても、多

少心にまかせて申さん念仏のみぞ、かざる心も

なければ、佛意に相應して決定往生はとぐへ

き。此心を得なは必しも、夜にはかざるべからず。

朝にても晝にても夕部にても、人の聞憚

からむ所にて、つねにかくのごとく申へし。所

詮決定往生をねかふ、まことの念仏申さんする

かざらぬ心ねを、譬は盗人ありて、人の財を思

かけぬすまんとおもふ心は底にふかけれとも、

面はさりけなきやうにもてなして、かまへてあ

やしけなる色を、人に見えじとおもはんか、

とし。そのぬすみころは、人全くしらねは、

すこしもかざらぬ心なり。決定往生せんする

「(3ウ)

心も又かくのごとく、人多くあつまり居た

らん中にも、念仏申る色を人に見せずして、

心にわたるまじきなり。その時の念佛は、佛

より外にはたれか知るへき。佛しらせたまは、

往生なんそ、疑と仰られければ、教阿弥陀佛

申さく、決定往生の法聞をこそ心得候ひぬれ

すてにさとりきわめ侍り。此おほせをうけたま

はさらましきは、このたびの往生はあぶなく

候はまし。但、此仰の如くにては、人のまへにて

念珠をくり、口をはたらかず事は、あるまじく

候やらんと。上人のたまはく、それ又僻韻なり。

念佛の本意は常に念を詮とす。されは念

念相續せよとこそすゝめられたれ。譬へは

世けんの人をみるに、おなし人なれとも蒙憶

相わかれて、憶病の者になりぬれば、身のため

くるしかるましき、聊のいかりをもおちお

それで逃かくる。豪の者になりぬれ

は、命をうしなふへき。こわき敵の、しかも

逃かくれなはたすかるへきなれとも、すこし

もおそれず、一しきりもせざるかごとし。是

がやうに、真偽の二類あり。地躰偽性に

して、かざる心ある物は、身のために要なき

いさゝかの事をも、必偽かざるなり。まことの心

ありて虚言せぬものは、聊の矯飭して、身

のために大にその益あるへき事なれとも、身

「(4オ)

「(5オ)

「(6ウ)

「(6ウ)

の利をは帰りみぬ、底にまことありて少も
かざる心なし。是皆本しやうに請て生れつき
たる所なり。其まことの心の者の往生せんと思
いて念佛に帰したらんは、いかならむ所いかなる
人のまへにて申とも、少もかざる心あるまし

「(7才)

ければ、眞實の心の念仏にして、決定往生す
へき也。何ぞ是をいましめん。又地獄はいつ
はり性にして、世間さまに付ては、いさゝか不定
の事もありしかとも、知識にあひて發心

「(7ウ)

して、往生せんとおもふ心ふかく成りぬれば、
念々相續せんとおもひて、いかなる所いかなる人
のまへにて、無相にひた申に申さん物、是
又眞實の心の念仏なれば決定往生す

へき也。全く制のかきりにあらず。いまいふ所は、
三心の中に一心もかけぬれば、往生せぬと
釈したまへるに、三心の中の眞實心、人ことに

「(8才)

發りたければ、その眞實心をおこすへき
やうをいふはかりなり。されはとて、たゞの時念
仏な申そとはいかゝすゝむへきと。又教阿弥陀仏
申さく、さきにおほせ侍るやうに、夜る念仏
申さんには、必ず起居候へきか、又念珠袈裟
をとり侍るへきかと。上人のたまはく、念仏の行は
行住坐臥をきはぬ事なれば、臥ても
申さん共居て申さん共、心にまかせ時によるへし。
念珠をとり袈裟をかくる事も、又折により

「(8ウ)

寐にしたかふへし。たゞ詮ずる所威儀はいかにも
あれ。此たびかまへて往生せんと思ひて、まこと

しく念仏申さんのみと大切なると仰られ
ければ、教阿弥陀佛、勸喜躍踊し合掌禮拜
して罷出にけり。翌日に法蓮房信空のもと
へゆきていとまこいしけるに、昨日上人の授

「(9才)

たまへる決定往生の義とて申いたして、此
たびの往生は、すこしも疑なきよしよろ
こび申て、東國へ下向しにけり。其後上人
御まへにて、法蓮房此事を申いたして、

侍りけるやと申されければ、その事なり。さる
舊盗人と聞置て侍りし程に、對機說法
して侍りき。一定心得たりけにこそ見へし

「(9ウ)

かともと仰られければ、教阿、彼河村に下
て住侍りけるか、所勞つきて終焉、望けるに、
同行に語ていはく、我往生は決定也。是則
深く上人の教を信する故也。往生のやう必

上人にまいりて申へしと遺言して、正念
たかはす、合掌みたるゝ事なく、高聲に
念仏數十返唱へておほりにけり。同行やかて

上落して、遺言の次第くはしく上人に申
ければ、よく心へたりとみへしが、相違せざり

「(10才)

けり。あはれなる事なりとぞ仰られける。
上人ある所には三心のやうをそくはしくをしへ、
ある所には三心のさた詮なきよしおほせら

れたり。是人によるへき事なり。名号を唱へ

ければ、必往生すとはかりまめやかにたのみて

となふれば、その人の心におのづから三心もそ

なはりぬるを、申く、三心とてことごとくしく

申程に、還て信心を亂る事も侍る也。かゝる

人の為には、三心のさたむやくの事なる

へし。若目ころは、疑の心もあり、三心く

せぬ人も聖教をかくすれば、道理におれ

て三心のおこる事もあれば、さやうならん人

のためには、大せつなるへきを、一かうに是を

ひせば、又そのとが有へし。此すぢを心へなほ

上人両様の御勸進更に相違をなすへからざる

ものなり。

法性寺の左京大夫信實朝臣の伯母なり

ける女房の、たつね申けるにつけて、上人の御返事に

いわく、念佛の行者の存候へきやうは、後世の恐

往生を願いて念仏すれば、おはる時かならず来

迎せさせたまふよしを存ちて、念仏申より外、

の事候はず。三心と申候もかさねて申時は、只

一ツの願にて候なり。そのねかふ心のいつわら

ず、かざらぬかたを至誠心と申候。この心の

まことにて、念佛すれば臨終に来迎すといふ

事を一念も疑、ぬかたを深心のとは申候。此上にわか

身もかの土へまいらんとおもひ、行業をも往生

のためとむくるを廻向心とは申候也。此故にね

「(10ウ)

かふころをいつはらすして、けに往生せんと思ひ
候へは、おのづから三心は具足する事にて候也。
抑、中品下生に来迎の候はぬ事はあるまじし

きなれども、とかれぬにては候はず。九品往

生に、各あるへき事の略せられてなき事

も候也。善導の御ころは、三心も品々に

わたりて有へしと見へて候。品ごとにおくく

の事候へ共、三心と来迎とは必有へきにて

候也。往生を願はん行者は、かならず三心を發

すへきにて候へは、上品上生にこれを説て

余の品々をもこれになぞらへてしるへし

みえて候。又我等戒品船筏もやふれた

れば、生死の大海をわたるへき縁も候はず。智

恵のひかりもくもりて、生死のやみをてらし

かたし。聖道の得道にももれたる我等が

為にほどこしたまふ。他力と申候は第十九

の来迎の願にて候へは、文に見えず候とも

かならず来迎は有へきにて候也。ゆめく御疑

あるへからず候。あなかしこく。源空

或人往生の用心につきておほつかなき

事を百四十五ヶ条までしるして、たつ

ね申たりけるに、上人御返事ありき。

せうくこれをしるす。

一、心を一ツにして、心よくなをり候はずとも

事をおこない候はず共、念仏はかりにても淨

「(12ウ)

「(13ウ)

「(14ウ)

士へまゐり候へき。答、心の亂るゝはこれ凡夫のならひにて、力およばず候。只心を一つにして、よく御念仏を申させたまはさへ、その罪を滅して、往生せさせたまふへき也。そのまう念よりもおもきつみも、念佛申候へはうせ候なり。

一、日所作は必、念仏を定候はずともよまれんにしたがいてよみ、念仏も申候へきか。

こたへていわく、數をさため候はねは懈怠になり候へは、かすを定候がよき事にて候。

一、にら・ひともし・ひる・鹿をくいて香せ候はず共、常に念仏は申へきやらん。

こたへていわく、念佛は何にもさわらぬ事にて候也。一、念佛をは、日所作にいくらばかりあてゝか申候へき。

答ていわく、念仏の數は二万べんをはしめとして二万三万五万六乃至十万までも申候なり。

この中に御心にまかせて、思食より候はん程申させおはしますへし。

一、五色の糸は佛には左にとおほせ候き。我手にいつれのかたにて、いかゝひき候へき。

答ていわく、左右の手にてひかせたまふへし。一、齋をし候て功德にて候やらん。かならずすへき事にて候やらん。

一、答ていわく、齋は功德うる事にて候也。六齋の御

「(14ウ)

齋そさも候ぬへき。又御大事に御わつらひなどもおこらせたまひ候は、さなく共只御念仏にても御心にわすれさせたまはずは、それにて生死をはなれ、浄土に往生せさせおはしますさんする事は、これによるへく候。

一、必ず佛を見、糸をひかへ候はず共、わか申さずとも、人の申さん念佛をきゝても死し候は、浄土には往生し候へきやらん。

答ていわく、かならず糸をひくといふ事は候はず。仏にむかひてまいらせねとも、念仏に申は往生し候也。又聞ても往生し候はねはよく／＼心ふかくての事にて候。

一、永く生死をはなれ、三がいに生れじとおもひ候に、極樂の衆生となりても其縁つきぬれば、此世に生ると申候は、まことに候か。たとへ國王共なり、天上へも生れよ。たゞ三界をはなれんとおもひ候に、いかにつとめおこないてか、かへり候はざるへき。

答ていわく、これもろ／＼のひが事也。極樂へ一たび生れ候ひぬれば、なかく此世に帰る事候はず。皆ほとけに成る事にて候也。但、人をみちびかんためには、ことさらに帰る事も候。され共生死にすへる人にては候はず。三界を離れて極樂に往生するには、念佛にすきたる事は候はぬ也。よく／＼御念仏候へし。

「(16ウ)

「(16ウ)

「(17ウ)

「(17ウ)

一、哥をよむはつみにて候か。

答ていわく、あなかに得候はじ、但し罪ともなり功德ともなる。

一、酒をのむは罪にて候か。

答ていわく、のむへくもなければ、此世のならない。

一、錫杖をば、必よむへく候か。

答ていわく、さなく共そのいとまに念仏一遍も申へし。尼法師こそありく時虫のため

によみ候へ。

一、臨終に善知識にあひ候はず共、日比の念佛

にて往生はし候へきか。

やうならず共、念仏申さは往生すへし。

一、心に妄念のいかにもおもはれ候は、いかし候へきや。

答ていわく、只よく念仏を申させたまへ。

一、ねてもさめても、口をあらわて、念仏申候はんはいかゝ候へき。

答ていわく、くるしからず。

一、六斎に、にら・ひる、いかに。

答ていわく、御まいり候はずはよく候。

一、毎日の所作に、六万十万の數遍の念珠をくりて申候はんと、二万三万の念珠を髓に一つづつ申候はんと、いづれかよく候へきや。

答ていわく、凡夫のならひ、二万三万をあつ共

「(18才)

如法には叶かたからん。只數遍のおゝからんにはすくへからず。名号を相續せんためなり。かならずしも數を要とするにはあらず、たゞ常に念仏せんがためなり。かすをきためずんば、懈怠のいんゑんなれば、しゆへんをすゝむるにて候。

一、破戒の僧、愚痴の僧、供養せんも功德にて候か。

答ていわく、破戒の僧、愚痴の僧をす多の世には、佛のこゝろ、貴へきにて候也。この御つかいに

申侍らぬ、きこめし候へ。此御詞は、上人のまさしき御てなり、阿弥陀經のうらにおしたり。或人

往生の用心につけて、条々のふしんをたつね申たりけるに、上人の御返事にいわく、

一、毎日の御所作に六万へんめてたく候。うたがひの心たにも候はずは、十念も一念も往生し候へとも、おしく申候へは上品に生れ候。釈にも、上品の花臺三泰見慈主を

到者ハ皆因念佛多。

一、百万遍の事、佛のぐわんにては候はねとも、小

阿弥陀經に、もしは二日、もしは三日ないし七日、念仏申人極楽に生れぬるとかかれて候へは、

七日念仏申へきにて候。その七日のほとん數は百万べんにあたり候よし、人師しやく

して候へは、百万へんは七日申へきにて候へ共、たえ候はさらん人は、八日九日などにも申され候へし。

一、(19才)

「(20才)

「(21才)

「(19ウ)

「(20才)

「(20ウ)

「(21才)

さればとて百万へん申さざらん人のうまる
ましきにては候はず。一念十念にても生れ
候ほどの念仏と思ひうれしさに百万へんの
功德をかさぬるにて候なり。

「(21ウ)

一、七ぜん全徳の事、おほせのまゝに候。さてこそ
逆修はする事にて候へ。されはのちの世をと
ぶらひ候はん人も、それをたのますして、我と
はげみて念仏申ていそき極楽へまいりて、

五通三明のさとりて、六道四しやうのしゆ生を
りやくし、父母師長の生所をたつね、心の

まゝにむかへとらんとおほしめすへきにて候也。

「(22オ)

又當時日ごとの御念仏をも、かつくゝ多かう
しまいらせられ候へし。なき人のために

念仏多かうし候へは、阿弥随佛ひかりをはなち、

地獄餓鬼畜生を照したまひ候へは、此三惡道

にしづみてくをうせらる物、そのくるしみやす

まりて、いのちおはりてのち、解脱すへきにて候。

大經にいわく、若在二途勤苦之處、見此

光明皆得一休息、無復憂惱壽終之後、皆蒙

解脱を。

「(22ウ)

天台 惠心僧都釈云

因行果徳 自利々他 内證外用 依報正報
恒沙塵數 無邊法聞 十方三世 諸佛功德
皆攝攝在 六字之中 是故稱名 功德無盡

此二文法相天台之祖師之尺也、弥陀六字之名号也。内一切之諸佛
願行、功德迷、納云文也、深、可秘々々。

「(23ウ)

大唐 慈恩大師西方要決二云、

諸佛願行 成此果名 但能念号 見包衆徳

故成大善 不癡任生 果名者弥陀六字之名号也。

「(23オ)